



囲碁棋士

# 井山 裕太さん

井山裕太さんは、日本の囲碁界で史上初めて七大タイトルの同時制覇を二度も達成し、国民栄誉賞も受賞した第一人者です。

2日制の碁と一手30秒の早碁の違い、人間を超えるレベルまできたAIとの葛藤、中国や韓国の棋士たちとの闘い、後進の養成…。

自由な世界が広がる囲碁の魅力を語っていただきました。

聞き手・構成：芳賀 淳、木村容子、小峯健介

—— 囲碁は、5歳のときにテレビゲームで覚えたそうですね。

スーパーファミコンと囲碁のソフトを父自身が遊ぶために買ってきて、それを隣で見ていて興味を持ったのが最初のきっかけです。

—— ルールもゲームで覚えた？

打ってはいけないところに打とうとするとブザーが鳴ったりとか、そういう感じで徐々に覚えていったと思います。

—— ゲームの強さはどのくらいだったのですか？

今と違ってものすごく弱くて、せいぜい5級ぐらいだったんじゃないですかね。だから、ルールをちょっと覚えて、少しできるようになれば十分勝負として楽しめるレベルだったので、ちょうどいい目標という感じだったかもしれないですね。

—— その後、お祖父様（アマ六段）にも教えてもらったのですね。わざと負けてもらった記憶ってありますか？

あまりないですね。祖父もそうですし、祖父の前に父ともやっていて、父もまったくそういうところはなかったんで、当時は負けるたびに泣いていた記憶があります。

—— そして視聴者参加の9路盤のミニ碁のテレビ番組に出たら、5週連続で勝ち抜いてしまった。

私とその番組をずっと見ていたら、母が勝手に応募していて、その番組の解説をされていたのが石井先生（石井邦生九段）でした。母が応募してなかったら、その出会いもなかったんで、今となっては感謝ですけども。

—— そこで石井先生から弟子にというお話があったんですか。

番組の収録が終わって一局打ってみようかとおっしゃって、19路盤で7子置いて対局させていただきました。その当時6歳なので、これだけ置いたら勝てるだろうと思っていたんですけど、コテンパンにされて、子供心にすごく驚いたのを覚えています。

—— 石井先生は井山さんのどこを気に入られたのですか。

先生がおっしゃっていたのは、とにかくすごく打つのが早い。早いんですけど、大事なところでは少し手が止まって、考えるタイミングとかそういうのが、何か先生の中で感じるものがあられたみたいで。

—— いわゆる内弟子とか通いの弟子というスタイルではなかったんですね。

私がまだ小さかったですし、先生のご自宅と私の住んでいた所がかなり離れていたんで、内弟子や通いの弟子は難しい。ちょうどネット碁の走りのようなものが始まったので、これを使ってみようと思った先生がくれたんだと思うんです。インターネットを使って先生

のご都合のいいときに教えていただいて、トータルで1000局ぐらい教わっているんじゃないかなと。

——師匠が弟子と打つのは2局だけという話もよく聞きます。ものすごく多いですね。

これだけ教えていただいた弟子はいないと思いますね。

——対局後に対局者で検討しますよね。それはどんなふうに？

対局が終わると、先生にお電話で講評していただいたんです。祖父が先生のおっしゃっていることを電話で聞いて僕に伝えてくれました。

——小学校3年で院生になって、中学1年で入段してプロになり、どんどんタイトルに近づいていきます。壁にぶつかったな、ということ？

日本の小学生の全国大会で、小学校2年生のときと3年生のときに運よく優勝できたんです。そのごほうびも兼ねて中国のエリートたちが集まる大会に特別に参加させていただきました。こちらとしては向こうでも優勝できるだろうと思って行ったら、自分クラスはゴロゴロいました。この人たちと戦っていくには今までのようではいけないと思わされました。

プロになって16歳のときに全棋士が参加する大会で運よく優勝できたんですけれども、そこからの数年間は、タイトルに近いところまではいくけれども、なかなか大事な一局で勝てなくて。その時期は、技術的にもそうだし、何か足りないんだろうなというのをずっと感じながら、それが何なのかもはっきり見えないような中で戦っていたと記憶しています。

——それはどうやって乗り越えた？

これをやったからというのも特になんですけど。でも、とにかく対局中は誰も助けてくれないので自分をいかに信じ切れるかが一番重要だなということを、強い先輩方と戦って痛感して。自分に自信を持って臨むということは、より意識してやるようにはなったかもしれないです。

——メンタルトレーニングは？

そこまでのことはなかったです。スポーツも好きでよく観るんですけど、素人ながら、すごくプレッシャー

のかかる場面でどういう心構えで臨まれているのかなとか、少しでも何かヒントになればと、観ていたのは覚えていますね。

最もプロとして尊敬しているのはイチロー選手で、イチローさんもあれだけの準備をして毎日臨むという、やっぱりすごくお手本となる方ではありますね。

——2日制の挑戦手合だと持ち時間が8時間ずつです。持ち時間は終盤まで残しておくタイプですか。

もともとはすごく早打ちでしたけれども、プロに入ってからどちらかというとたくさん考える方になりました。特に2日制をたくさん経験させていただくようになってからは、できれば残しておきたいという思いはあるんですけど、その場面で後悔のない選択をしたという思いも強くなってきて、早い段階で時間がなくなることがある。どっちかというとそういうタイプだと思います、今は。

——終盤になって、もうちょっと残しておけばよかったなと思いいなることも。

しょっちゅうですね。毎回到近いぐらい思いますけど。そこは非常に難しいところです。時間をいくら残していてもそれまでに形勢を損ねてしまうとどうにもならないこともよくあるので。

——2日制の碁と一手30秒の早碁との違いは？

本当にマラソンと短距離走ぐらい違う、感覚的にはですね。その辺の切り替えは非常に難しいし重要だなとは思います。

一手30秒ですと、当然、読める量が限られてきますし、感覚的な部分で打つ手を選択していく比率が明らかに上がってくると思いますね。なので、自分の感覚では早碁の方がそのときの自分の状態が結構出やすいというふうに思っています。

もちろん逆に2日制の難しさも当然あるんですけれども、ある程度時間があればミスをしてでも立て直す、気持ちを立て直す時間があったりします。

——着手で迷った際のモットーはありますか？

あまりにも選択肢が多くて、正直判断がつかない場面ならば、自分の打ちたい手というか、最初にこう思った手とかを選びやすいんですけど。

二者択一で、本当にどちらも甲乙つけ難いときは、例えばこちらはちょっと先が見えないけど、一番自分の中で最善というか、険しい道のりだ。こちらは少しそれに比べるとリスクは少ないけれども、もしかしたら少し甘い手で最善ではないかもしれないという道。そういうときは、自分の感覚を信じて、険しくても最善だと思う道を選ぶ傾向にはあると思います。

—— 囲碁では「前に打った手の顔を立てるかどうか」が勝負の分かれ目のときがありますよね。

はい。囲碁をやっている人だと、たぶんみんな分かんと思うんですけど、自分が前に打った手を活かすようにその後も続けていきたいんです。ただ、前に打った手が悪い手だと分かっているのにそれをやっちゃうと、どんどん取り返しのつかないことになっていくというのがよくあるので、本当に自分が悪い手を打ったなというときは、つらい作業ですけど潔く認めて、忘れてというか断ち切って、またこの場面でどうしていくべきかができるかどうかはすごく大事なと感じますね。

—— 対局以外の研究はどのように？

詰碁は、基本的には読む力を鍛える練習といわれていますけれども、そういう面もあるし、詰碁をやることで、野球選手でいうとキャッチボールじゃないですけど、その日によってすらすら解けるとときと、ちょっと詰まってしまうときとか、やっぱりあるような気がするんです。そういう状態を見るという面もあるような気がします。

プロ棋士の棋譜を碁盤に並べて研究するのは、もちろん今もあるんですけど、今はそれこそスマホでもパソコンでも、どこにいても見られる状態なので、碁盤に並べることもやりますけど、移動中にそういうものを見てチェックしたりとか、考えたりが多くなっているかもしれないですね、時間的には。

一番大きくここ数年で変わったのは、やっぱり人工知能ですね。自分が対局したものをAIに入力して、AIはどういう手を高く評価するかとか、そういうところも含めて、それを使っただけの研究に割く時間が多くなっています。

—— AIが勧める手を使いますか？

今は、人間よりもはっきりAIが上回ってしまっているというのが、まずひとつあるんです。先を見通す力とか、読むスピードとか計算のスピードとかでは、もうありません。ただ、AIが打ったり、この手を高く評価していると言われても、実際に自分が打っていたら、やっぱり真似ができないなということがよくあって。それはAIはすごく先まで見通せているから、その手が選択できるのであって、人間では、ちょっとそこまでは無理というところだと。その場面ではその手が真似できても、あとが続かないとあんまり意味がないので。

自分が打ちたいと思った手を入力してみると、(AIの予測する)勝率が下がることがよくあることなので、それを見たときにどうするか。ただ、あまりにAIが示す勝率を気にしすぎてしまうと、何もできないとなってしまうがちなので、常に葛藤はありますね。

—— 人間の碁の魅力は？

人間の方はミスも出ます。正直言うと、ミスしたときに、その人の本当の力が出るんじゃないかなと思うところもあります。特に2日目の夕刻という極限に近いような状態でやっているとき、普通の元気な状態だったらあり得ないようなミスが出たりとか、逆に追い込まれた状況だからこそ出るような手があったりとか。そういうのはAIにはないものだと思いますし、ミスも含めて人間の勝負の面白さはあるのかなとは思っています。

この人のこの手はすごいなと感じられるのも人間の碁の魅力の1つかなとも思うので、そのあたりはAIの碁との違いはあるかなと思いますね。

—— 勝ち負けの繰り返しはストレスになりますね。

特に負けたとき、その次の対局はわりと短いスパンできますので、いかに前のことを次の対局には持ち込まないかというのは、すごく重要だなと感じています。囲碁の対局って、すごく孤独なので、自分が考えていることとか、対局中誰かに聞いてもらうこともできないし。

特に対局が終わった後は、あんまりひとりで過ごしたくないタイプかもしれないです、自分は。

—— 30年ぐらい前から中国と韓国が急速に力を伸ばしてきて、残念ながら日本は今は3番手です。



中国は本当に小さいときから英才教育のような形で、取りあえずやらせてみると感じます。そもそも人口も違いますし、本当にたくさんの子供たちに囲碁を教えて、すごく小さいときから鍛えて、残っていった人が、今の世界のトップグループにいるという感じだと思うんですけど。

1人で研究するというよりは、まとまってみんなで常に共同生活のような形で、それこそ切磋琢磨してやる環境が整っているという、そういう印象はありますね。

—— 対戦してみると？

囲碁には、終盤の「寄せ」と呼ばれる段階があるんですけど、そういう（地を）計算をする力は、わりと囲碁の中では答えが出やすい分野です。そういうところは徹底的に鍛えられていることと、あとは序盤もみんなで深く研究をして、序盤はとにかく普段しっかり研究したものをぶつけて、その後の大事な場面に時間を残しておく。すごく勝負に徹底しています。やっぱり勝つのが非常に難しい相手たちだなと感じるし、重要な場面での集中力も含めて、すごく精度が高いという印象はありますね。

ただ、日本の棋士に比べてピークの年齢が早いんですけれども、成績が落ちていくのも早いという傾向には、確かにあるような気がしますね。

—— ご自分が弟子を育てるとしたら？

自分がやってきたようにやらせるかどうか、正直分からないですね。ただ、中国、韓国、基礎的な部分をしっかり子供のうちから鍛えておくというのは、やっぱりすごく重要というか、いいやり方だとは思いますが。なので、そういうところは、私に限らずですけど、日本の今の子供たちを教えるような方たちも取り入れてやっていると思いますね。

—— 女性の棋士も活躍されていますね。

囲碁の世界でよく言われるのは、女性の方が積極的というか厳しい、わりと局地戦に力を発揮されるタイプの棋士が多いかなと感じるところはありますね。現状は、どんどん女性棋士のレベルも上がってきてい

て、実際今、一番近いところでいうと早碁棋戦なんですけど、男女全員出られる竜星戦という棋戦で、17歳の上野愛咲美さんという女性の棋士が決勝に進出したんです\*1。

世界的に見てもトップで戦っている女性棋士も何人かいますので、男女差とか、そういうのはない世界かなと思いますね。

—— この記事を読んで囲碁を始めてみようという方に向けて。

囲碁は、序盤の構想だとか、全体を見る力が結構な比率を占めるゲームです。だから大人になって始められても、楽しめるというか、強くなれる方も多いと思います。まずは、スマホのアプリとか。あまり難しく考えずに。

—— 気楽にということですね。

そうですね。それを一番お伝えしたいです。

—— 上達するコツがあれば。

やはり簡単なものでもいいので、詰碁とか。先ほどキャッチボールのようなものって言いましたが、最初はできなくても続けていると、筋トレも一緒だと思うんですけど、やっているうちに徐々に付いてくる部分はあると思うので。

—— 囲碁の魅力はなんでしょう。

ひとつは、男女差も年齢差も国による差もないし、もちろん言葉もいらないですし、誰もが平等に楽しめる。そこはやっぱり大きな魅力の1つだと思います。あとはその人のやりたいようにできる。こうでなければいけないというようなものでもないと思います。その辺が自由ですごく魅かれた部分だと思いますね。

#### プロフィール いやま・ゆうた

大阪府出身。日本棋院関西総本部所属。石井邦生九段門下。小学2年生のときに少年少女囲碁大会全国大会で優勝。中学1年生のときにプロ入り。2013年第37期棋聖獲得で史上初の六冠同時制覇を達成。同時に史上3人目の七大タイトルをすべて獲得。2016年に史上初の七冠同時制覇を達成。翌2017年には囲碁・将棋を通じて初めて2度目の七冠同時制覇を達成。日本の囲碁界で圧倒的な強さを誇っている。2018年国民栄誉賞受賞。

\* 1：このインタビューは2019年9月19日に行われた。その時点で第28期竜星戦のトーナメント決勝に、上野愛咲美・女流棋聖（当時17歳）が勝ち上がっていた。同月23日に行われた決勝では敗れて準優勝となった。全棋士が出場できる棋戦で、女流棋士の最高成績はこれまでベスト8だったが、その記録を更新した。